



## 史跡 古津八幡山 弥生の丘展示館

### 利用案内

開館時間 / 10:00~17:00  
休館日 / 月曜日・休日の翌日  
年末年始 (12月28日~1月3日)

入館 / 無料

〒956-0846新潟市秋葉区蒲ヶ沢264番地  
花と遺跡のふるさと公園内(新潟美術館隣)

TEL・FAX **0250-21-4133**

Email [bunkazai@city.niigata.lg.jp](mailto:bunkazai@city.niigata.lg.jp)

### 史跡 古津八幡山 弥生の丘展示館アクセス

#### お車で

- ・日本海東北自動車道 新潟亀田ICから約20分(13.8km)
- ・磐越自動車道 新津ICから15分(10km)
- ・磐越自動車道 新津西スマートICから約14分(7.9km)、ETC(自動料金支払いシステム)搭載車両で、新潟中央IC方面のみ乗降可能(福島方面の乗降はできません)

#### 電車で

- ・JR新津駅東口/バス停から、秋葉区バス「新津駅西口行」に乗車23分、  
「美術館・植物園前」で下車、徒歩すぐ
- ・もしくは新潟交通バス「矢代田経由白根・湯東行き」に乗車12分、  
「新潟美術館入口」で下車、徒歩5分
- ・JR矢代田駅前バス停から、秋葉区バス「新津駅東口行」に乗車7分、  
「美術館・植物園前」で下車、徒歩すぐ
- ・もしくは新潟交通バス「新津行き」に乗車、「新潟美術館入口」で下車、徒歩5分
- ・JR古津駅から徒歩20分(1.6km)
- ・JR新津駅からタクシー15分(5.1km)
- ・JR矢代田駅からタクシー5分(2.7km)



イラスト：早川 和子

新潟市文化財センター

〒950-1122 新潟市西区木場2749-1  
TEL 025-378-0480 FAX 025-378-0484 Email [bunkazai@city.niigata.lg.jp](mailto:bunkazai@city.niigata.lg.jp)



国指定史跡

ふるつはちまんやま  
古津八幡山遺跡歴史の広場

弥生の丘展示館ガイドブック

No.1

新潟市

## 古津八幡山遺跡の概要

古津八幡山遺跡は、信濃川と阿賀野川に挟まれた新津丘陵上に立地する弥生時代後期の大規模な高地性環濠集落です。集落は丘陵上に立地し、周囲に濠をめぐらしています。環濠に囲まれる範囲は南北400m、東西150mほどです。部分的な発掘調査ですが竪穴住居が50棟以上、方形周溝墓・前方後方形周溝墓などが確認されています。

高地性環濠集落は弥生時代後期に日本海側に出現しますが、古津八幡山遺跡は西日本を中心とする勢力がこの地域に及んでいたことをよく示しています。また、集落が途絶えた後の古墳時代には新潟県内最大の古津八幡山古墳が築かれています。

古津八幡山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代にかけての社会情勢や変化を示す貴重な遺跡として、2005年に国史跡に指定されました。

## 古津八幡山遺跡のあゆみ

古津八幡山遺跡は1987年の土取り工事に伴う試掘調査によりに発見され、新潟県内最大規模の古墳と弥生時代後期の大規模な高地性環濠集落であることが明らかになりました。重要な遺跡であることから、1990年には遺跡の主要な範囲が現状のまま保存されることになりました。

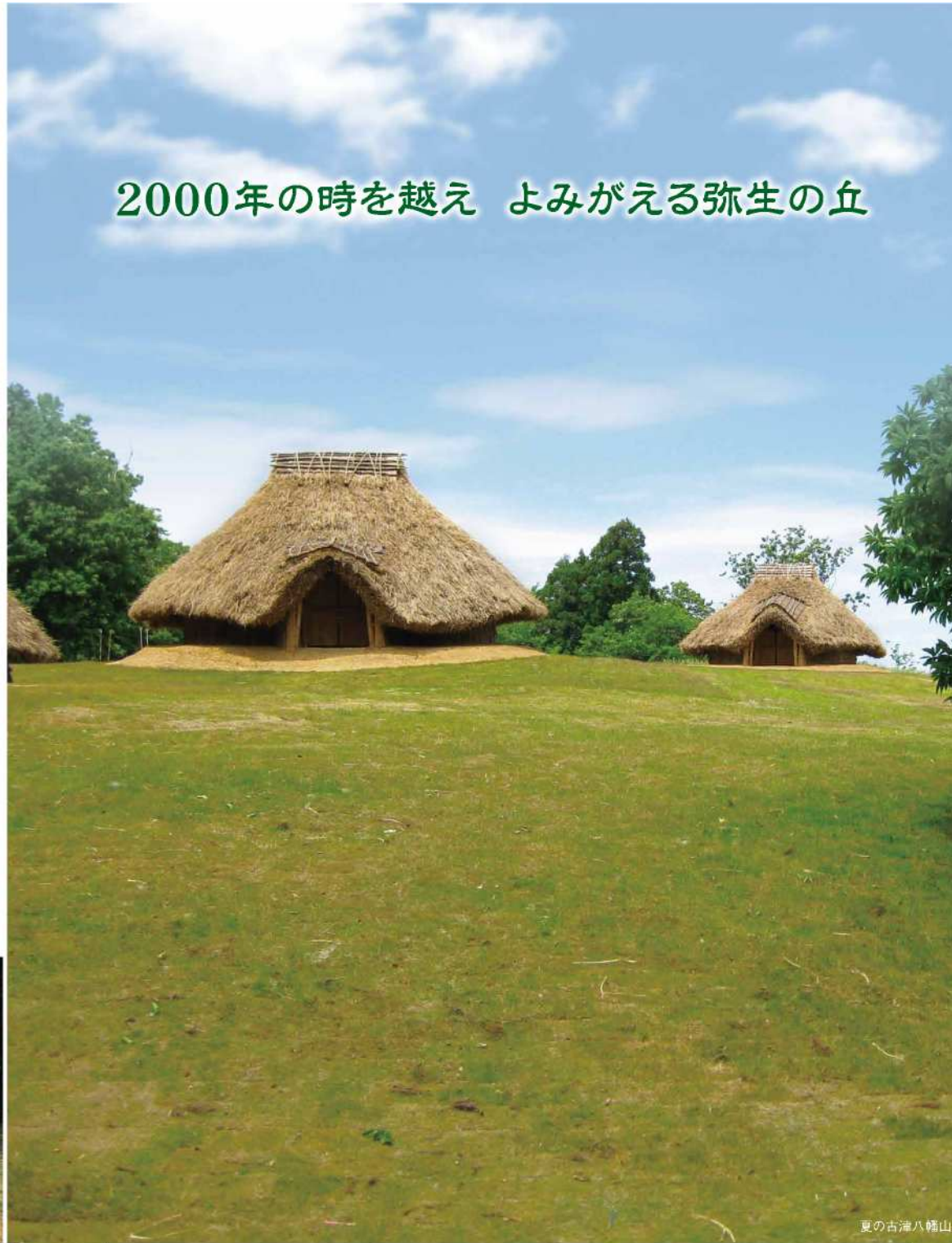
2005年7月14日に国指定史跡になり、2011年に古津八幡山古墳が追加指定となりました。現在は119,641.23㎡の範囲が国史跡に指定されています。

1987年の第1次から2011年の第17次まで発掘調査が行われてきました。今後も遺跡の内容を究明するための発掘調査が計画されています。

2007年からは遺跡の内容が明らかになった部分から史跡整備に着手しています。

## 古津八幡山遺跡の整備

弥生時代になかった現代的なものは原則としてつくりませんという基本方針のもと、弥生時代の集落を彷彿とさせる復元整備を行っています。現在までに竪穴住居7棟や環濠・方形周溝墓・前方後方形周溝墓を復元しています。



# 2000年の時を越え よみがえる弥生の丘



- 1 新津丘陵の自然
- 2 蒲原の夜明け — 旧石器・縄文時代 —
- 3 邪馬台国の頃の古津八幡山  
— 弥生時代 —
  - 3-1 環濠
  - 3-2 竪穴住居
  - 3-3 四角い墓とムラ長  
方形周溝墓・前方後方形周溝墓
  - 3-4 弥生土器
  - 3-5 石の道具・鉄の道具
- 4 蒲原の王墓 — 古墳時代 —  
古津八幡山古墳
- 5 蒲原の製鉄基地 — 奈良・平安時代 —



秋の古津八幡山



冬の古津八幡山

夏の古津八幡山



前方後方形周溝墓



空から見た古津八幡山



初冬の古津八幡山



植物観覧会



冬の古津八幡山



竪穴住居と内環濠



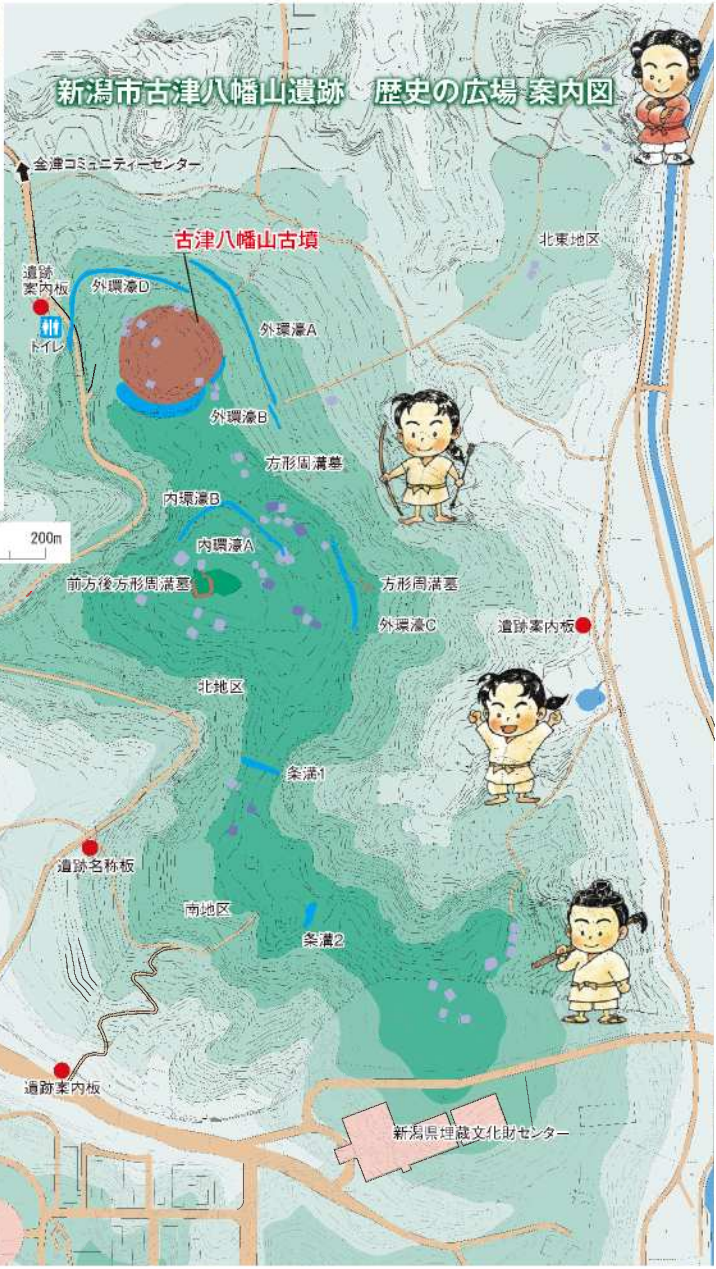
トイレ



弥生の丘展示館



遺跡名称板



竪穴住居と内環濠



もみじと桜



方形周溝墓



池とメタセコイア



竪穴住居



秋のメタセコイア



初冬の古津八幡山



総合学習で来た中学生



築溝2



市民参加による竹の伐採



遺跡案内板



遺跡見学会



竹の伐採実験

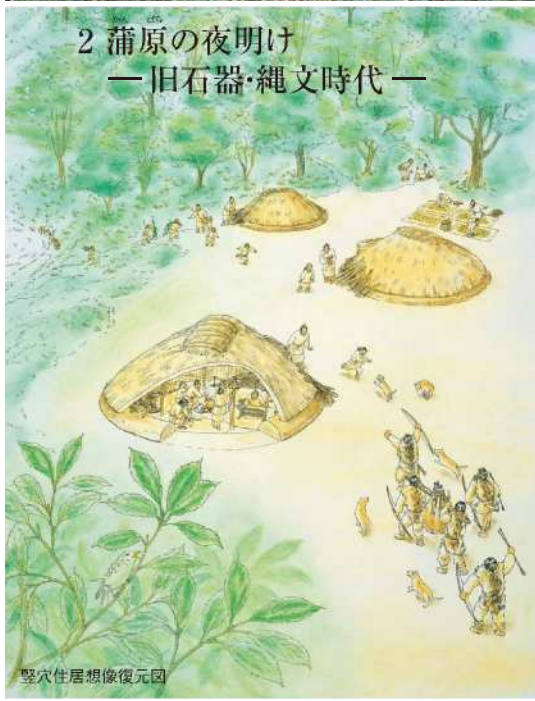
# 1 新津丘陵の自然



新津丘陵では植物・動物などの豊かな自然環境とかわりあいながら、1万年以上前から人々が暮らしてきました。古津八幡山遺跡周辺に見られるコナラ・クスギの林は、奈良時代以降の新緑林の姿を今に伝えています。

縄文時代は、谷などの湿ったところにはハンノキ・トチノキ等、丘陵の乾燥したところにはクリ・コナラ等が生育していました。クリやトチノキは縄文人が育てていた可能性があります。弥生時代以降になると、クリ・コナラは減少し、トチノキは激減します。イネ科の花粉が増えるので、水稲耕作が行われていたと推測されます。

# 2 蒲原の夜明け — 旧石器・縄文時代 —



竪穴住居想像復元図

古津八幡山遺跡では1万年以上前の旧石器時代の遺物が見つかっています。新潟市内最古の人類の痕跡です。

秋葉区藪谷沢遺跡からは縄文時代草創期(約12000年前)の石斧などがまとめて出土しました。

縄文時代後期中頃(約4000年前)には古津八幡山遺跡北東地区に竪穴住居がつかれます。



古津八幡山遺跡などの石器(旧石器時代)



藪谷沢遺跡の石器(草創期)



縄文土器(後期)



北東地区の竪穴住居

# 3 邪馬台国の頃の古津八幡山 - 弥生時代 - 3-1 環濠



環濠掘削想像復元図

米づくりには不便な丘の上のムラ。ムラは濠や土塁で囲まれています。米づくりが始まると、農作業を共同で行うために、人々は集まってムラをつくりました。それまでよりも安定して食料が得られるようになり、蓄えもできました。しかし今度はその蓄えの奪い合いなどから、他のムラとの争いが起きるようになりました。(約1900年前)

## 防禦的集落(高地性集落・環濠集落)

弥生時代後期になると平地から30m以上の丘の上にムラ(高地性集落)があらわれます。水稲耕作に不向きなこと、周囲を濠で囲んでいる集落(環濠集落)があることから中国の歴史書「魏志倭人伝」に書かれた「倭国乱」と関連づけて、戦いに備えた防禦のための集落と考えられています。越後平野では新津丘陵から長岡市にかけて平野を見下ろす丘陵上に多く見つかっています。これらの集落の多くは弥生時代終末期には廃絶します。



糸濠1



糸濠2



内環濠B



内環濠B



会い違う外環濠A-B



外環濠A



外環濠C



外環濠A



外環濠A

### 3-2 竪穴住居



南地区の竪穴住居群



竪穴住居想像復元図



竪穴住居(南地区)



竪穴住居の貯蔵穴



竪穴住居(北地区)



竪穴住居(北地区)



壺



北地区の竪穴住居群

#### 竪穴住居

古津八幡山遺跡では、2011年の第17次までの発掘調査で住居が50棟見つっています。住居は地面を掘り下げてつくる竪穴式です。山から水が流れ込まないように、掘った土を周りに盛り上げて、さらにその外側に溝を掘っています。住居の形は隅丸方形(隅の丸い四角形)で、4本の柱と中央に薪を燃やす炉があります。また、壁際には物を貯蔵する穴があります。



竪穴住居(北東地区)



竪穴住居の貯蔵穴

### 3-3 四角い墓とムラ長 方形周溝墓・前方後方形周溝墓



方形周溝墓想像復元図



方形周溝墓1

方形周溝墓2



方形周溝墓1・2



方形周溝墓1



方形周溝墓1の埋葬施設



方形周溝墓2の周溝

#### 方形周溝墓

環濠の外側から、方形周溝墓が3基見つかりました。3基という墓の数は、一時期のムラの人口が85人程度と推定されていますので、とても少ない数です。有力者に限られていたのでしょうか。墓の一つからは埋葬施設が見つかりました。その中に入られた棺は、木の板を組み合わせた木棺であることがわかりました。中からは短剣と矢尻が見つかりますが、ムラ長に割えられた副葬品と考えられます。

#### 前方後方形周溝墓

標高55mの最も高い場所から1基だけ見つかった墓で、弥生時代終末期につくられたものです。その頃には丘の上にあった竪穴住居はなくなり、環濠は土砂でほとんどが埋まっていた。墓は前方後方形周溝墓と呼ばれているものです。周溝の一边の中央にある通路がしだいに発達して前方後方形になったと考えられています。古津八幡山遺跡の前方後方形周溝墓は、会津地方にある弥生時代後期・終末期の前方後方形の墳墓を解明する鍵をにぎっています。



前方後方形周溝墓



方形周溝墓3

### 3-4 弥生土器



甕(北陸系)



壺(北陸系)



甕(地元系 八幡山式)



広口壺(地元系 八幡山式)



甕(東北系 天王山式)



高杯・器台(北陸系)

古津八幡山遺跡では東北系・北陸系、両地方の特徴を併せ持った地元系の土器があります。それ以前の、弥生時代前期・中期も新潟県内では同じような状況でした。日本海・信濃川・阿賀野川を介して各地域の文化が伝わりました。これらの土器は、竪穴住居から一緒に見つかるので、ともに使われていたことがわかります。外来系は古津八幡山遺跡へやって来た人々がつくったか、それらを真似て、つくられた土器です。

古津八幡山遺跡では、遺物だけではなく各地域から人々が来ていたと推測されます。長野系の土器は、つくり方や文様のつけ方の特徴が長野系の土器と同じです。使われている粘土は古津八幡山遺跡の他の土器と変わらないので、長野から新潟へ来た人(おそらく女性)がつくったものと考えられます。また、北海道から新潟へ伝わったものとしては、後北C1式土器、東北部や新潟から各地に広がったものとして天王山式土器とアメリカ式石鏃があります。

#### 天王山式土器

福島県白河市にある天王山遺跡から出土した土器を標識としている土器型式で、弥生時代後期のおもに東北地方南部に分布する土器です。口縁部の突起、交互刺突文(シクザグの文様)、縦走る縄文、縄目文様の複雑な装飾などが特徴です。



長野系(箱清水式)と山陰系の土器



壺(東北系 天王山式)

### 3-5 石の道具・鉄の道具



石器(石鏃・石斧・砥石)・鉄器(鉄剣・鉄鏃)・土製品(紡錘車)など



鹿角装鉄剣(部分)



アメリカ式石鏃



つぶて石

新潟県内でも弥生時代中期になると石の道具に代わって鉄の道具が使われるようになりました。鉄はリサイクルされるので、遺跡から見つかる点数は少ないのですが、鉄器用の砥石が残されたり、石器が極端に少なくなったりすることで、鉄器が使われていたことが推測できます。

古津八幡山遺跡では、石の矢尻・ドングリ等をすりつぶす磨石、伐採用の鉄斧・砥石がおもな石と鉄の道具だったと推測されます。

#### 鹿角装鉄剣

方形両溝蓋の埋葬施設から見つかった鉄製の短剣です。鹿の角の枝の部分でできた把がついていました。遺体の腹部付近に剣先を足の方に向けて刺さられていました。類似のものは、東日本の弥生時代中期後半から終末期の遺跡で見つかっています。古津八幡山遺跡の鉄剣は最北の事例です。朝鮮半島製の鉄剣に日本で鹿角製の把が装着されて、もたらされたと推測されます。布らしいものが付着しており、布で大切に包まれていたことを想像させます。

#### アメリカ式石鏃

弥生時代後期の東北地方でもおもに分布するアメリカ式石鏃は、アメリカ先住民が使っていた矢尻に形が似ていたことから名づけられました。ただし、アメリカ先住民との直接の関係はありません。両側のえぐりは矢柄に装着するための工夫と考えられています。

#### つぶて石

外環濠の上層・中層からまとまって出土した石です。全部で18点、約18.9kgになります。遺跡内に石はないので持ち込まれたことは明らかです。敵に投げるために持ち込まれたものとする説もありますが、用途は不明です。

## 4 蒲原の王墓 — 古墳時代 — 古津八幡山古墳



空から見た古津八幡山



周濠



周濠



古墳盛土



古墳築造想像復元図

弥生時代終末期になると、古津八幡山遺跡の高酸性集落は廃絶します。一方、麓の低地に舟戸遺跡が新たに出現します。この時期、越後平野では新たに集落が出現したり、集落内での遺物量が増加したりするなど、大きな社会変化のあったことが推測されます。古津八幡山古墳がつくられるのは八幡山集落の廃絶から約150年後のことで、弥生時代の墓に比べ規模が飛躍的に大きくなっています。舟戸遺跡からよく見える場所に築られました。(約1600年前)

### 新潟県内最大規模の古津八幡山古墳

古津八幡山古墳は直径60mの円墳で、新潟県内最大の大きさです。古墳の大部分は土を盛ってつくられています。古墳の南西部には幅約8mの大きな濠が掘られており、ここを掘った土を古墳の盛土として利用しました。

古津八幡山古墳をつくった人物がどのくらいの範囲を治めていたのかは不明です。信濃川と阿賀野川の河川交通を中心に、東西・南北地域との交流などで越後平野をまたにかけて活躍した人物像が推測されます。



舟戸遺跡の土師器

## 5 蒲原の製鉄基地 — 奈良・平安時代 —



製鉄・製炭想像復元図

奈良・平安時代の新潟県は越後・佐渡の2国に分かれていました。越後国は石船郡・沼垂郡・蒲原郡・古志郡・三島郡・魚沼郡・頸城郡の7郡、佐渡国は羽茂郡・雑太郡・賀茂郡の3郡からなっていました。

工具や農具などの材料になる鉄、そして食べ物を蓄えたり盛りつけたりする須恵器という焼き物は原則として郡内で生産し、使われていました。大規模な製鉄遺跡も当時の郡ごとに残っています。(約1200年前)

### 「金津」の地名の由来

古津八幡山遺跡のある丘陵の麓から新潟県立植物園にかけての南北450m・東西650mの範囲で、製鉄炉7基や木炭窯20基以上、鉄くず9.5tなどがみつかっています。これらは奈良時代から平安時代の遺跡です。鎌倉時代の文獻に使われた「金津」の地名はこの鉄づくり由来するものです。当時、新津丘陵は蒲原郡のものづくりの中心地でした。新津丘陵東側は須恵器・土師器という焼き物づくり、西側の金津丘陵では鉄づくりが行われていました。



製鉄炉(民村遺跡E地点)



製鉄炉(大入道跡C地点)



居村遺跡E地点全景



大入道跡C地点全景



木炭窯(居村遺跡A地点)



木炭窯(居村遺跡C地点)



古津八幡山遺跡の北東上空から南西の日本海方面を望んだ各時代の風景です。時代が変わっても、遠くには新潟の象徴である弥生山・角田山が見えます。各時代の地形の復元は、地質学の論文を参考にしました。

### 蒲原の夜明け 縄文時代後期(約4000年前)

土器を发明した縄文人。土器を用いた煮炊きによって、トングリなどのアケ焼きや、お年寄り・子供にも消化の良い栄養のある食事ができるようになりました。ウサギや魚、貝なども捕っていました。森では鹿を追っています。平野には、湖や湿地が広がり、小さなムラが見えます。

- 1 縄文時代後期前半(南三十稻埵式期)。香先、新緑の頃。平野には湖沼・湿原が広がり、海岸には砂丘が形成されています。平野には集落はまだ見られません。平野に集落がつくれるのは縄文時代の終わりの頃のことです。
- 2 北東地区の一面に竪穴住居がみつられました。湿地にはハンノキ・トチノキ、丘陵上にはクリ・コナラなどが生えています。
- 3 シカを追う男たち。
- 4 釜淵川では魚を捕ったり、貝を探ったりしていました。

### 邪馬台国のごころの古津八幡山 弥生時代後期(約1900年前)

米づくりに不便な丘の上のムラ。ムラは濠や土壁で囲まれています。米づくりが始まると、農作業を共同で行うために、人々は集まってムラをつくりました。それまでよりも安定して食料が得られるようになり、富えもできました。しかし今度はその富えの奪い合いなどから、他のムラとの争いが起きるようになりました。

- 1 弥生時代後期後半。初夏。平野の湖沼は土砂の堆積がすすみ、湖原に変わっています。海岸の砂丘も発達し、大きく広がっています。平野部にも集落がむすましながら見られるようになります。
- 2 丘の上に環濠が築かれ、土壁が築かれています。環濠によって境つきの区画に分かれています。一時期にあった竪穴住居は20棟前後、ムラの人口は80~100人程度と推測されます。
- 3 北東の一面にも竪穴住居が数棟あります。
- 4 環濠の外側には方形周溝墓がつくられています。ムラ長など有力者の墓です。
- 5 丘の麓には谷から流れ出る沢の水を利用した水田がつくられています。ムラ人が1日に2合の米を食べたと仮定すると、その米を収穫するためには14haもの水田が必要だったと推測されます。



### 蒲原の王墓 古墳時代前期(約1600年前)

争い事が収まると、ムラ人は丘の上から麓に住まいを移しました。この地域を治めた豪族が住む屋敷(百屋)がムラの一面にあります。ここで、政治・経済・軍事・宗教などの活動が行われました。かつてムラがあった丘の先端には土を盛り上げた大きな墓(古墳)が築かれています。

- 1 古墳時代前期。収穫の秋です。平野部は土砂が堆積し陸地化が進み、小さな集落が見られるようになります。平野側の水田は弥生時代よりも広がっています。
- 2 丘の上の弥生時代のムラがなくなり、弥生時代終末期の前方後方周溝墓が築かれてから150年近く経っています。集落があった丘の上にはコナラやクスギ・クリの木が育っています。
- 3 かつて弥生時代の集落があった丘の上に環濠内最大の古津八幡山古墳がつくられています。麓にあるムラからよく望める丘の北端です。
- 4 古墳の北側の麓にムラがあります。付近には古墳時代のムラが広範囲に広がっています。豪族の屋敷(居館)はまだ見つかっていませんが、あったことはほぼ間違いありません。これらのムラの中のどこかにあると推測しています。
- 5 弥生時代にあった東側の谷水田は日当たりが悪かったためか、水の水が冷たかったためか、古墳時代には米がつかられなくなりました。平野側の扇状地の開発が進み、水田が広がっています。

### 蒲原の製鉄基地 奈良・平安時代(約1200年前)

越後国蒲原郡金津の官営製鉄基地。山麓では炭窯から煙が何本も立ち上っています。クリやコナラなどの木々は伐られ、木炭の材料になります。鉄の原料である砂鉄を溶かすためにたくさん木炭が使われました。平野には多くのムラが見えますが、原野の開発には斧や鋸などはなくてはならないものでした。

- 1 平安時代の初め。初冬、初雪が降る前です。丘の麓には製鉄炉やたくさん木炭窯がつくられ、周辺の木々は皆伐られています。木炭窯からは煙が立ち上っています。
- 2 製鉄のために丘陵に生えている木々が皆伐られました。丘陵の土砂は崩れ、川に流れ出し、平野の湖沼や湿地を埋めていきました。
- 3 平野にも川沿いに集落が多く見られ、水田も広範囲に広がっています。最後は平安時代になると集落や水田の数が急激に増加します。蒲原郡の集落や水田の開発には金津でつくられた鉄器が使われました。

